

第31回 日本社会臨床学会総会

ーアッサンブレアで語り合うフェミニズム, ケアワーク, 精神医療ー

日程: 6月10日(土)～11日(日)

10日 9:30 年次総会/運営委員選挙受付

12:40 一般受付

13:30～16:30

アッサンブレア:「フェミニズムと労働と能力主義」

発題者 栗田隆子(文筆家、『ぼそぼそ声のフェミニズム』)

18:00～夜間交流会

11日 09:30～12:30

アッサンブレア:「あらためてケアワークを問う」

発題者 中川貴之, 松木宏史(運営委員)

13:30～16:30

アッサンブレア:「精神医療について語り合う」

発題者 兵頭晶子(歴史学研究者、『精神病の日本近代』)

長谷川利夫: 杏林大学保健学部教授

精神科医療の身体拘束を考える会代表

三吉譲とお互いさん会(三吉クリニック院長と当事者会)

石原孝二(東京大学教授・精神医学の哲学)

松本葉子(薬剤師・精神保健福祉士)

会場: 遊行寺信徒会館(藤沢市)

【藤沢駅】

●徒歩: 藤沢駅北口より約15分

●バス: 藤沢駅北口4番または5番「戸塚バスセンター行」
「大船駅西口行」乗車、「藤沢橋」下車

●タクシー: 藤沢駅北口「遊行寺まで」とお伝えください。

【藤沢本町駅】

●徒歩: 約20分

問い合わせ: ヒロセ 090 4836 6219

参加費※

2日参加 3000円

1日参加 2000円

※学生は半額

夜間交流会 飲食実費

みしな
きとやー
ん

アッサンブレア (イタリア精神病院制度廃絶に至る着火点となった患者職員集会の対話形式)

発言権は車座中央の空席に入ることと得る。参加者誰もが自由・対等に発言し、周囲席に戻る

開始、休憩、終了のみ司会



日本社会臨床学会

自己紹介(Facebookより)

社会・文化の中の「臨床」という営みを点検・考察し、さらにそのあり方を模索することを目的として、1993年4月、日本社会臨床学会は発足しました。以降、今の時代を生きる人間の悩みや想い、その背後にある社会の矛盾や問題を、さまざまな領域や立場の人々が共に自由に考え合える場を作り出すことを目指して活動を続けてきています。

会員の多くは医療・教育・福祉といった現場の労働者・利用者、関心を寄せる人です。大学等の研究者もいますが、その専門領域は多様です。既存の専門分野・領域を共通点として集う場所ではなく、差別や優生思想の問題、資格・専門性を疑う視点等にこだわりながら日常を暮らしている人々が共に考えることを求めて集う場所となっています。

学会の主な活動は、学会誌『社会臨床雑誌』(年2冊)、学会紙『社会臨床ニュース』(年数回)の発行、総会(年1回)・シンポジウム・学習会等(随時、年数回)の開催、単行本の出版などです。

[ホームページ](http://sharin.jp) <http://sharin.jp>

「フェミニズムと労働と能力主義」

このアッセンブレア(車座で語り合う集い)では、女性の自立や労働、競争や活躍につながる議論と距離をにおいて、「能力がないとされた女性はどうなるの?」「1日8時間週5日働くななんて無理...だるすぎん?」「媚びてないのに媚びてると言われても何て返していいかわからん。話すのも嫌になるっしょ?」などの問いからはじめたいと思います。それとともに、体制内や制度内に入るための議論や社会運動を展開することの問題性、制度から外れて自己責任でなく生きることを展望したい。まずは、『ぼそぼそ声のフェミニズム』で「のんびりする」はそれだけでも抵抗」だと提起してくれた栗田隆子さんをお迎えして、運営委員の伊藤と対談し、その後、みなさんと車座でもっとぼそぼそ語りあいたいと思います。

「あらためてケアワークを問う」

「ケアワーク」という言葉は、広く高齢者福祉・障害者福祉・児童福祉・看護でよく使われます。分野に応じて介護・看護・保育・療育など様々な日本語が当てられます。手厚いケアには手厚い予算措置が必要であることは当たり前ですが、日本では「エッセンシャルワーク」と持ち上げられる一方で、労働条件は低劣なまま置かれています。また、ケアの水準も十分ではなく、いまだに大規模収容型モデルから脱却しているとはいえない現状があります。

しかしそうはいっても現場レベルでの創意工夫の積み重ねや、ケア労働者・サービス利用者の連帯・協同の萌芽など、くらしに根差した「抵抗」も捨てたものではありません。大規模収容・管理と収奪のケアから、くらしに根差した連帯・協同のケアへと大風呂敷を広げませんか。ケアワークを私たちの手に取り返すべく、車座で現場の実態、従事者の思い、当事者の要求・要望など語り合いたいと思います。

「精神医療について語り合う」

「病氣」をカッコに入れ、生きること、「人間する」ことに定位して精神病院制度を廃絶したイタリア地域精神保健制度の語り部・松嶋健さんを2018年にお招きし大好評だった同じ会場です。

その際、呉秀三以来のこの国の精神医療施策の「最初のボタンの掛け違い」を暴いた歴史学研究者の兵頭晶子さんが、5年前のバトンもつなぎ、今回の口火を切ります。戦後「高度成長」期からの精神病院乱造・特例化・市民総合病院(地域)からの精神科病棟排除・長期入院・多剤大量投薬・拘束・虐待・死亡退院等、今年2月に発覚した滝山病院問題に至るまで、「病院監置」こそが「この国に生まれたるの不幸」であり続けていること、その歴史と、現在、未来を問います。精神科診断に代わるPTMFアプローチも話題に。

※「PTMF」とは「パワーPower・脅威Threat・意味づけMeaning・フレームワークFrameworkの略記」。